少年の日の思い出 (4)

（「ぼく」は、エーミールのもつヤママユガを盗んでしまいました。）

すぐにぼくは、このチョウを持っていることはできない、持っていてはならない、元に返して、できるなら①何事もなかったようにしておかねばならない、と悟った。そこで、人に出くわして見つかりはしないか、ということを極度に恐れながらも、急いで引き返し、階段を駆けあがり、一分の後にはまたエーミールのへやの中に立っていた。ぼくはポケットから手をだし、チョウを机の上においた。それをよく見ないうちに、ぼくはもうどんな不幸が起ったかということを知った。そして泣かんばかりだった。ヤママユガはつぶれてしまったのだ。前羽が一つと触角が一本なくなっていた。ちぎれた羽を用心ぶかくポケットから引き出そうとすると、羽はばらばらになっていて、つくろうことなんか、もう思いもよらなかった。

盗みをしたという気持ちより、自分がつぶしてしまった美しい珍しいチョウを見ているほうが、ぼくの心を苦しめた。②微妙なトビ色がかった羽の粉が、自分の指にくっついているのを、ぼくは見た。また、ばらばらになった羽がそこにころがっているのを見た。それをすっかり元どおりにすることができたら、ぼくはどんな持ち物でも楽しみでも、よろこんで投げ出したろう。

悲しい気持ちでぼくは家に帰り、夕方までうちの小さい庭の中にこしかけていたが、ついにいっさいを母にうちあける勇気を起した。母は驚き悲しんだが、③すでにこの告白が、どんな罰をしのぶことより、ぼくにとって、つらいことだったということを感じたらしかった。

『お前は、エーミールのところに、行かねばなりません』と母はきっぱりと言った。『そして、自分でそう言わなくてはなりません。それよりほかに、どうしようもありません。お前の持っている物のうちから、どれかを埋めあわせによりぬいてもらうように、申し出るのです。そして許してもらうように頼まねばなりません』

あの模範少年でなくて、ほかの友だちだったら、すぐにそうする気になれただろう。彼がぼくの言うことをわかってくれないし、おそらく全然信じようともしないだろうということを、ぼくは前もって、はっきり感じていた。

（高橋健二訳『ヘッセ全集2 車輪の下』新潮社 所収「少年の日の思い出」による）

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「何事もなかったようにしておかねばならない」とあるが、何事もないようにするとはここではどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア　ヤママユガを元の場所に戻し、盗んだ事実がなかったかのようにすること。

イ　ヤママユガを隠し、自分が手に入れたことを気づかれないようにすること。

ウ　ヤママユガを盗んでしまったことを謝罪し、エーミールと元の関係に戻ること。

(2) ――線②「微妙なトビ色……ぼくは見た」とあるが、このときの「ぼく」の様子として適当なものを選びなさい。

ア　ヤママユガの微妙なトビ色の美しさに、改めて見とれている。

イ　ヤママユガをどうやって修復するか、考えをめぐらせている。

ウ　ヤママユガをつぶしてしまった現実に、心を苦しめられている。

(3) ――線③「すでにこの告白が……つらいことだった」とはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア　エーミールにきらわれてしまうこと自体が、どんな罰よりも「ぼく」にとってはつらいことだったということ。

イ　母に自分がしたことを打ち明けること自体が、どんな罰に耐えるよりもつらいことだったということ。

ウ　ヤママユガをつぶしてしまったこと自体が、どんな罰を受けるよりもつらいことだったということ。